【資料紹介】

【翻刻・解題】山陰歴史館蔵『採風集二編料』

渡邊　健
（米子工業高等専門学校）

摘　要

米子市立山陰歴史館が所蔵する鹿島恒勇家旧蔵の和歌資料の中から、『採風集二編料』と『甲寅夏　採風集二篇料　詠草』の二つを翻刻、紹介する。[1]これらは、近世後期に米子の豪商として栄えた鹿島家（鹿島本家）の九代・鹿島長行が安政四年（一八五七）刊『類題採風集』二編に投稿した際の詠草であり、全国的な類題和歌集と地方歌壇との関係について考える上で重要な資料である。

キーワード：鹿島家　鹿島長行　米子歌壇　類題和歌集

解題

●『採風集二編料』

本書は、米子市立町の鹿島恒勇家（鹿島本家）旧蔵本で、現在は米子市立山陰歴史館の所蔵である。（米子市教育委員会整理番号「C1MG　〇二三一」）

本書は袋綴一冊の写本で、縦二八・二糎×横二〇・四糎、大本よりやや大きな書型である。表紙は本文と同じ楮紙で、外題は中央に直接「採風集二編料」と書かれている。（写真1）現在は整理者により、表紙右側中央で紙製のつづり紐で綴じられているが、本来は仮綴で重ねた料紙の右側（右上二カ所、右下二カ所）に穴を開け、紙縒で綴じていたと考えられる。（写真2ではわかりづらいが、裏表紙側の穴に一カ所、紙縒片が残っている。）

表紙には、「黒澤翁満大人撰　採風集二編料　はゝきの国米子　鹿嶋治郎右衛門　長行上」とあり、幕末の米子の豪商・鹿島長行が安政四年（一八五七）刊の黒澤翁満撰『類題採風集』二編に投稿する和歌をまとめた資料であったことがわかる。表紙見返しには、「古樹下見㊀印廿八首ヤリタリ　十月頃ニハ出来ニ候」とあり（写真3）、米子の歌人で『類題採風集』二編の序文を書いた中林古樹が、長行の投稿前に本書の下見を行い、㊀印も付したことが記されている。

本文は二二丁で遊紙はなく、一面八行書き、和歌は一首一行で書

かれている。第一丁目表から二二丁目裏までに四季、雑・恋の歌が収められる。末尾には、「右弐百二十首」とあるが、実際の総歌数は二一七首である。成立時期は、先述した表紙見返しの中林古樹による書き付けに「十月頃ニハ出来ニ候」とあり、『類題採風集』二編の刊記に安政四年十一月とあることとの対応を考えると、同年（安政四年・一八五七）のことを言っていると見てよいであろう。本書の保存状態は決して良くはなく、経年による汚れや本の傷み、虫損があり、本文と虫損が重なって解読の困難な箇所もある。

本書の書写者は、表紙にあるように鹿島長行（天保五年（一八三四）～明治二八年（一八九五）、六十二歳）で、所収歌の作者も長行である。稿者が近時、翻刻・紹介した山陰歴史館蔵『無題歌合集』は、長行が嘉永六年（一八五三）～安政二年（一八五五）にかけて鹿島家で行われた歌会・歌合を集成した書物であるが、同書に「長行」作として収められた歌と、本書の歌との間に共通歌がかなり認められる[2]。長行は近世後期、米子で豪商として栄えた鹿島家（鹿島本家）の九代目で、幕末～明治初期の米子の町政に重要な役割を果たすと共に、米子の文化の庇護者となり、自らも歌道に熱心であった[3]。

本書には、しばしば本文とは別筆で、和歌に合点や種々の符号、抹消線や語句の修正等が書き込まれており、長行が『類題採風集』二編への投稿に当たって、複数の者から下見や添削を受けていることがうかがわれる。同集に実際に採られた歌は、歌番号一一・九〇・一一二・一二一・一六〇のわずか五首であるが、地方の無名歌人への評価としては、このあたりが上限だったのかもしれない。このように本書は、近世後期に陸続として編まれ、全国的に流行した類題和歌集への地方歌人の投稿の実態を考える上で重要な資料ということができる。

●『甲寅夏　採風集二篇料　詠草』

本書も、鹿島恒勇家旧蔵・現山陰歴史館所蔵の資料である。（米子市教育委員会整理番号「C1MG　〇二四〇」）本書は縦一三・三糎×横一八・〇糎の写本一冊で、横中本ほどの大きさである。美濃判よりやや小さめの楮紙の料紙をまず縦中央で、次に横中央で二つ折りにしたものを十枚分重ね、右側中程に二箇所穴を開けて紙縒で結んで綴じている。十枚目の紙は破損しており、途中から切り取られたようにも見えるが、長行の所為か伝存過程での破損なのかはわからない。その他は本書の保存状態は並で、経年による汚れや劣化は感じるものの、本文の読解に支障を生じる箇所はなかった。

表紙には鹿島長行の筆跡で中央上に「詠草」と書かれ、右上に「甲寅夏」、左下に「長行」と記されている。（写真4）そして、朱筆で「詠草」の字の右に「採風集二篇料」と書かれ、作者の所にも朱筆で「〈国所〉〈鹿嶋〉長行〈上〉〈御印可下候〉」と書き加えられている（〈〉内が朱筆）。本書はその体裁からいっても、嘉永七年（一八五四・甲寅）夏という時期からいっても、元々は簡易な和歌草稿で、長行がしかるべき相手に添削を請うために作成したものだったのであろう。それがその後いずれかの時点で、長行が安政四年（一八五七）刊の『類題採風集』二編に和歌を投稿する際の元資料として利用されることになったのではないかと見られる。本書の表紙見返しに、何の目的かは分からないが、家の間取り図が書かれているようなところからも（写真5）、初めから全国的な類題和歌集への投稿を期して作成した資料であるとは思われない。

本書は全一八丁で、その内墨付本文は初めの一三丁、残り五丁は白紙である。本文は一面六行～一二行書きで、和歌は一首を上句・下句に分けて二行書きにしている。一丁表～六丁表までは一丁に和歌が四首ずつ書かれているが、六丁裏からは三首ずつとなり、総歌数八四首が収められている。歌の配列に規則性はなく、四季・恋・雑の歌が混在しただ雑然と並べられている印象を受ける。長行が安政四年に作成したと見られる『採風集二編料』との間には多くの共通歌があり、おそらく本書を母体として和歌を増補・整理して成ったものと考えられる。

本書には朱筆による合点や丸印、歌題や和歌の語句の訂正・補入の指示等が本文とは別筆で多く書き込まれており、先述したように本来はしかるべき歌人に添削を請うために作成されたものと考えられる。一方、歌の下部に丸印が黒字で付されていたり、歌に大きく横線や斜線を引いている箇所が多くある（当該歌の除棄を示すと見られる。写真6）のは、長行本人による所為であろうか。それらが『採風集二編料』とどう関わっているかについては、今後の検討に俟ちたい。

注

（1）『採風集二編料』『甲寅夏　採風集二篇料　詠草』については、原豊二氏が「幕末の米子歌人―新出鹿島本家和歌資料の探求のために―」（『山陰研究』第三号、平成二二年一二月）の中で書誌を紹介されており、今回参考にさせていただいた。

（2）『無題歌合集』の本文については、渡邊健・米子高専古文書の会「【翻刻・解題】山陰歴史館蔵『無題歌合集』（一）～（三）」（『米子工業高等専門学校研究報告』第五五号、令和二年三月）を参照していただきたい。

（3）鹿島長行については、拙稿「【研究ノート】山陰歴史館蔵『無題歌合集』について」（『山陰研究』第一二号、令和元年一二月）に詳述したので、説明はそちらを参照されたい。

【翻刻　『採風集二編料』『甲寅夏　採風集二篇料　詠草』】

凡例

一　底本には、いずれも山陰歴史館蔵本（鹿島本家旧蔵）を用いた。

二　翻刻に当たっては、原文の表記を尊重したが、最小限次のような処置を行った。

1　和歌はすべて一行書きとし、歌頭に算用数字で通し番号を付した。

2　読解の便宜を考慮して語の清濁や漢字の送り仮名を改めた。送り仮名を補った場合は、その仮名に傍点を付した。

3　仮名の表記は現行の字体により、「ハ・ニ・ミ・ノ」等の片仮名表記も平仮名に改めた。また、歴史的仮名遣いと違うところは原文のままとし、「ママ」と傍記した。

4　漢字の表現は、原則として通行の字体によった（俗字や略字は原則として用いない）。ただし、旧字・異体字などを部分的に残す（「嶋・浪・湊」などはそのままとする）。指示語や助詞・助動詞などの漢字もそのまま残した（「此」「哉」「也」など）。

5　読みが難しいものに限って、最小限、漢字または漢語句の右傍に（　）を付し、平仮名で読みを施した。

6　繰り返し記号「〻」「〳〵」は原文のままとしたが、濁音はそ

れぞれ「〻」「〳〵」で表記した。

7　底本には多くの書き入れや訂正があり、歌の評価を示すと見られる合点（「へ」で統一して表示）や「○」「△」「㊀」等の記号、見せ消ち・挿入等による語句訂正の状況はなるべく翻刻に反映させるようにした。書き入れには朱筆のものも多いが、表示が煩雑になることを恐れて、ここでは黒・朱の区別をしていない。ただし、『甲寅夏　採風集篇料二　詠草』において、歌頭に付された朱筆の丸印は「●」とし、歌の下部にある黒で書かれた丸印は「○」として区別して示した。また同書では和歌の除棄を、歌に大きく横線や斜線を引いて示していると考えられる。両者に差異があるかは分からないが、翻刻では横線だけの場合は「／」、横線と斜線で消している場合は「×」として歌の後に示した。

8　見せ消ちは底本では訂正する語句に抹消線を施すか、あるいはその左側に抹消記号「〻」を付し、右側に訂正後の文字を本文よりやや小さく示しているが、本稿では見せ消ち部分はすべて二重抹消線で示した。また、語句の挿入の指示は〔　〕を付けて示した。

9　翻刻の都合上、題・詞書は底本の記載形式に関わらず、和歌より二字下げとした。

10　不審な箇所には「ママ」と傍記し、読解困難な箇所は「■」で表記した。

11　丁付は、各丁の終わりに　」を付し、その下の括弧内に丁数と表裏（オ・ウ）を記した。

〔採風集二編料　翻刻〕

黒澤翁満大人撰

採風集二編料

はゝきの国米子

鹿嶋治郎右衛門

長行上

」（表紙）

古樹下見㊀印廿八首

ヤリタリ十月頃ニハ出来

ニ候

」（表紙見返し）

立春

1　○曙の雲ゐをかける田づが音に千とせの春もひゞきそめつゝ

2　○春きぬとにほふ霞の山眉に朝けのけぶり立ちそめにけり

3　○吹きなびく雲の袖より明けそめて四方の山なみ春や立つらん

春明けぼの

4　○雲影の花かと見えし山のはの霞もにほふ春の曙

雪中若菜

5　○こゝろあてにけふは尋ねて雪ながら野ゝ辺の若菜誰かつむらん

」（1オ）

遠山華

6　○白雲の外山の桜咲きぬらん此のごろ薫る窓の明けぐれ

若水

7へ○汲みなれし庭の井筒も春来ぬと今朝若水にあらたまり鳧（けり）

若菜

8 △山〳〵の霞の衣春くれば軒ば放れて若菜つむ也

山家鶯

9 谷の戸も春は来にけり梅が香に初音をこぼす軒の鶯

」（1ウ）

春色浮水

10 ○あつ氷霞のひまにとけしより山下水の音けぶるなり

11 〵○山川に氷ながるゝ此の頃の水にも春の色は見ゆ（え）けり

野辺花

12 嵐吹く木末は花の色消えてつら〳〵かをる旅の袖かな

田家梅

13 ○朝風に畑やく烟結ぼられ梅が香寒し小山田の里 ㊀

14 ○山田守る庵のみぎりの真柴垣ほに出でて匂ふ梅も有りけり

」（2オ）

閑庭菫

15 世に住みし春のゆかりに我が庭の垣根の菫花咲きにけり ㊀

鶯

16 △長閑にも垣根の梅のかほり（を）来て風の行くへに鶯のなく

川辺柳

17 ○山川の氷ながれて朧夜の月にけぶれる青柳のいと

帰雁

18 久かたの雲井にみてる浪の上に名残も霞む雁の声哉

」（2ウ）

残雪

19 花咲ける草の庵はのどけきにいまも残れる跡の白雪

20 △松の戸も此のごろ匂ふ花の香にけたれて残る峰の白雪

海上霞

21 ○わたつみの沖吹く風も隙見えて霞にしづむ浪の色哉

22 △海士舟の行くへをしたふ風見えて沖の霞も打ちなびきつゝ ㊀

花

23 打ちわたす峯の横雲いつしかと別るゝ見れば花咲きにけり

」（3オ）

待花

24 足引の山桜戸の朝な〳〵花咲かむ日を待つぞ楽しき

隣家花

25 ○糸桜なびく隣の垣内より風にまかする花の色かな

蛙

26 ○春雨にみどり深むる沢の辺の若草隠れ蛙なく也

瀧辺花

27 ○水上は雲に埋めるしら瀧のいともて結ぶ山桜かな

夜春雨

28 △庭の面の月は朧に照りながら濡るゝ（ママ）みれば春雨ぞ降る

」（3ウ）

惜春

29 立ち並ぶ杉のみ山の夕日影きえゆく春の暮れをしむ也

三月尽

30 ○山ぶきのやつれがちなる我が庵は春も小蝶の夢と暮れにき

開夏

31 △ぬぎかへる花の衣の名残まで残るばかりに夏は来にけり

32 ○明け渡す磯山松に散る浪の薄雲かゝる夏はきにけり

水鶏

〔夏月〕

33 ○窓遠く水鶏啼く夜の月影にわが隠れ家も戸ざしかねつゝ　㊀

34 △小雨降る野河の岸の夕まぐれ水草隠れに水鶏啼く也

35 雨さそふ軒の松風たゆむまも水鶏鳴く夜はゑこそねられね

月前納涼

36 △夕闇は風にうすれし山のはにほのめく月の影ぞ涼しき

燕子花

37 かきつばた木隠れ茂き一本にゆかりの色の花は咲きけり

」（4ウ）

稲妻

38 稲妻のあたりやいづこむぐらふの葉末の露の光をぞみる

39 かの見ゆるは山が末は暮れ初めてこゝろゆかしき稲妻の影

40 ○我が門の浅茅が露のたま〳〵に宿るもはかな稲妻のかげ　㊀

夏月

41 薄衣涼しき月の影さしてしばし戸ざゝぬ夏の夜は哉

五月雨

42 雲かゝる岡の松原風絶えて日かげもゆらぐ五月雨ぞ降る

」（5オ）

卯花

43 △朝ぼらけ一むら白き道とへば賤が垣根のうつぎ也けり

44 夕まぐれ若葉の奥に一むらの雪かと見えてうつぎ咲きけり

五月雨晴

45 うき雲はやゝうすらぎて山のはの嵐にはるゝ五月雨の空

46 うき雲の絶え間も見えて五月雨の晴れ行くかたに烟り立つなり

田上夏月

47 △山松のすけきをもるゝ月影に早田の水も秋の色せり

」（5ウ）

月前時鳥

48 月いづる山松影は雲もなくしのび音高きほとゝぎす哉

蛍

49 ○吹きはらふ小ざゝが風に露更けて月の行くへに飛ぶほたるかな

早苗露

50 △植ゑはてし小田の早苗を見るが内にみどりの露ぞ吹き渡しけり

田家夏

51 △夕立の過ぎ行く小田のあし垣にたゞよふ風も涼しかりけり

」（6オ）

初秋月

52 西空にほのめき渡る三日月のあらわれ（ママ）そめて秋や立つらん

53 △山の辺の松の葉越しの薄霧に秋めき渡る三日月の影

野秋風

54 朝ぼらけ遠のはり原露落ちて野づらにしるき秋風ぞふく

55 見わたせばち草小薄露ちりて鳴なく野づら秋風ぞふく

川上霧

56 ○吉野川流るゝ水の音す也ふちせもわかぬ瀬ゝのうき霧

」（6ウ）

山家砧

57 常盤木の梢の月の影ふけて山窓くらく衣うつ也　㊀

58 月
△秋の夜の入江に更けて哀れ也月の水草もなびきのみして
59 うき雲は松の梢に晴れにけりのどかに月の入るかたや見ん

60 待月
鳴つる〻雲井の雁の声にのみ高根の月のまたれぬる哉
61 △月を待つ峯の松原霧こめて空だのめなる霄にも有る哉 ㊀
」（7オ）

62 虫
○霧深きをかご小道の洲崎原袖にこぼる〻松むしの声〔かな〕
63 △月くらき片山里の雨雲にふり出でてなく鈴むしのこゑ
64 夕されば小笹が上を吹く風の絶えまもとむる松虫の声

65 関路月
△雲はらふ嵐も絶えて見るが内に不破の関路は月ぞ越え行く

66 月前管絃
△さやかなる笛のしらべに中空の月も声あるこ〻ちこそすれ
」（7ウ）

67 ○糸竹の声のひゞきに雲はれて影おもしろき秋の夜の月
68 すなほなる神世の事も笛竹の音にあらはれて月も澄みけり

69 鹿声何方
△有明のつれなき影にいづこよりあらしのおくる小男鹿の声
70 ○山深み霧立つ奥の夕暮に立ちど定めぬ小男鹿のこゑ

71 月前擣衣
○山のはにほのめく月の影めで〻夜ごろ打ちそふ賤がさ衣
72 △かの見ゆる磯山嵐音更けてかたぶく月に衣うつなり
」（8オ）

73 山家紅葉
○山姫の織るか山路の紅葉〻は露をそめ木の錦也けり
74 ○朝霧の八重立つ山の紅葉〻は人しらぬまに散りやはてなん
75 村時雨晴れ行く見れば山のはも軒ばもおなじ紅葉也けり
76 ○分けまよふ山ふところの紅葉がり鹿のふしどに宿やもとめん

77 擣衣
△紅葉ちる片山影は霧こめて誰が里なれや衣うつ声 ㊀
78 小夜更けて袖しぼれとや閨寒き枕の山に衣うつらむ
」（8ウ）

79 萩
月更くる片山影は露ちりてきしの萩原風そよぐ也
80 ○秋萩の花の中道分け入れば袂ににほふ露の色かな
81 △小山田のきしの萩原風過ぎて月影ながら露ぞみだる〻

82 雨中雁
村雨をつばさにかけて雁がねの声もはるけき朝ぼらけ哉
83 ○うき雲を分け行く雁の翅より折〳〵そゝぐ雨の音かな
84 △村雨の音さへ寒き明け方の雲間にまどふ初雁のこゑ
」（9オ）

85 庭菊
○朝夕に露の数さへ千代かけてたえずもかをる庭の白菊
86 咲きつゞく籬の菊のひと色は夕日のそむるにほひ也けり ㊀
87 △初霜はおかばおかなん庭の菊秋の咲■は詠めつくしぬ

88 暮秋
△きのふけふ霜こそかゝれ刈り残す稲葉くたれて秋やきえ行く
89 刈り残す小田のおくてにそよぎつる風さへさえて秋ぞ暮れぬる

90 ヘ○浅茅生の露斗（ばかり）なる虫の音もかれ〳〵にこそ秋更けにけり（れ）
」（9ウ）

霧中鹿声

91 ○霧深き山田のひたのひたすらに哀れをこめて小鹿鳴く也

蔦

92 △雨はれし軒ばの松の音絶えて夕日にこぼす蔦紅葉哉

きり〳〵す

93 △物おもふ霜夜の窓に月更けて身にしむばかり啼くきり〳〵す

94 △きり〳〵す鳴く音さびしき夕暮に小野丶笹原小雨降る也 ㊀
」（10オ）

菊露

95 きのふけふ垣内に咲ける白ぎくのにほひも深き露の色かな

96 ○露結ぶ籬の菊の花の色をやつしもはてぬ庭のまり垣

雨中聞擣衣

97 △手弱女が打つ・や砧の音す也雨のこゑさへたえ〳〵にして

田上霧

98 △かきつ田の稲葉のほのへ霧こめてゐせきの水の音むせぶ也

橋上霜

」（10ウ）

99 霜結ぶ丸木の橋の哀れ世を渡りし人の跡に見る哉

100 ○ゆふ月の霜の上なる雲影に渡るも寒き山川のはし

101 ○さえ増さる夜はほの〳〵と明け方に霜置き渡す前の棚橋

雪

102 △かの岡の暮れ行く雲の末晴れて雪に染めたる木丶の色哉

103 △吹きはらふ風もと絶えて山のはの日影あらはにつもる雪哉

104 冬枯れしはや川（を）瀬にさし下す筏の上に雪は降りつ丶

105 さえ渡る雲間の月を思ひ寝の枕につもる夜半の雪かな
」（11オ）

水仙花

106 △此のごろの垣根は雪に埋もれてひとりやつれぬ花の色かな

107 我が園の竹の垣根に置く霜をよすがに咲ける花の色かな

松上霜

108 △夜たゞ吹く嵐は絶えて磯山の松の葉白く霜さやぐ也

109 △有明の月の名残を我が門の松にみせたる霜の色かな

110 朝づく日ほのめく松の一むらに跡見えそめて霜けぶる也

河氷

111 △杣川や氷のくさびうつなへに瀬丶こす浪も音よはりつ丶（ママ）
」（11ウ）

112 ヘ○冬されば水さへかれて谷川のさゞれのひまもうす氷せり（に）

113 山風のさそふ木の葉をせきとめて氷にかくる瀬丶のしがらみ

暁千鳥

114 △難波がた磯の芦原月消えてあかつきやみに千鳥鳴くなり

115 △明石がた暁くらき汐風に一むらかよふ磯ちどりかな

116 磯山は松かげ寒き明けがたの嵐が末にちどり啼く也

117 舟はつるかこの湊の暁にうらさびしくも啼く千鳥哉
」（12オ）

冬遠晴

118 夢にだにまだ見ぬ不二の雪の上に閨もる月は今か照るらん

冬田

119 冬されば見るめも寒き小山田のひつぢは霜に結ぼ丶れつ丶

120 刈り残す山田の稲葉風見えて影さへ渡る冬の夜の月

海上雪

121 〈和田の原漕ぎ行く舟も見るが内に帆影かくれて雪は降りけり 白

霰

122 山風に霰たばしる此の頃は鳥の鳴く音もくだけのみして

123 小ざゝ原山風ならで降る音の身にしむものは霰也けり

124 梢吹く風にたぐひて池の面の月影くだく玉霰哉」（12ウ）

初雪

125 朝ぼらけ雲の上なる大神の嵐の末に初雪ぞふる

126 朝風に峯の白雲かつ散りて初雪降れり岡の松原

時雨

127 我が門の川辺の柳散りはてゝひとり過ぎ行く夕しぐれかな 白」（13オ）

海辺雪

128 降りわたす磯べの松の白雪に浪もこぼるゝ心地こそすれ

129 浦風は吹けどふかねど澄みがまの煙の上に雪は降りつゝ

落葉

130 雨雲の夕日は染めし色消えてひとりこぼるゝ薄紅葉かな 白

131 人しらぬ遠山影の薄月夜風に交じりて木のは散るらん

132 朝とでに山の下道行く子らがかざす袂にはゝそ散るなり

133 雪さそふ外山の峯の朝風に紅葉のみちる秋篠の里」（13ウ）

134 たつた山時雨に染めし紅葉ゝも散りみだれたる朝ぼらけ哉

山家冬

135 〈山里は落ちばの音も小夜更けて月より外にとふ嵐かな

136 木の葉吹く片山里の冬の夜はいとゞ淋しき峯の松風

137 冬はなほ淋しかりけり明け暮れをたゞ松風にとわれのみして

山家落葉

138 吹き越ゆる風を時じみ山里の夢の枕に木のは降る也

139 霜深きみ山がくれの松の戸の落ちばにつれてとふ嵐哉」（14オ）

竹雪

140 〈打ちなびく風の姿もあらはれて雪におきふす軒の村竹 白

磯千鳥

141 浪さわぐ磯わの千鳥声きえて嵐の末にさゆる月影

142 吹きかへす風にくだくる荒磯のひまなき浪に千鳥啼く也

143 風荒き磯の苫家の夕烟りみだるゝかたに千鳥鳴く也

遠山雪

144 けさ見れば遠山かづら花ならで木ゝの姿に雪降りにけり」（14ウ）

145 降りつもる高根の松の雪の静けさに麓の松も音せざりけり

146 白雲も立ちはなれたる遠方の高根の雪に朝日さす也

147 遠山の雲の中に高根の雪や深からし〔軒端の〕松の梢も風絶えにけり 白

雪中眺望

148 吹きすさぶ風もとだえてあしの屋に入り日かゞよふ雪の上かな

埋火

149 いつしかと霜に成りぬる埋火に炭さすほどはしばし寒けし 白

150 ひとり守る閨の埋火小夜更けて置く霜白くなりにけるかな
」（15オ）

炭竈

151 ＜○降る雪に松や埋もる（ねぐら　まどふ）炭がまの煙をめぐる夕烏哉　㊀
152 時雨行く峯の嵐の音はして煙にくるゝ小野ゝ炭がま
153 ＜朝日影曇ると見しは雪ならで烟立つ也峯の炭がま

山家時雨

154 松風の時雨にさわぐ冬の夜は寝覚めのみして明け果てにけり

雪中梅

155 雪の戸をたゝく嵐にかをる也ふるき垣内の梅の初花
」（15ウ）

山路雪

156 雪深き山路越え行く青馬のいなゝく声を聞くも寒けし

鷹狩

157 △雪積もる松の木の間に見えにけり今朝の狩場の鳥の姿を
158 村時雨過ぎ行く野辺の狩衣ぬれし袂に夕日さすなり
159 御狩にと降る雪しのぐ鷹人の衣手寒き小野ゝ夕暮

山雪

160 ＜△帯にせる細谷川の音絶えてみ雪降る也（流れさへ　つもる）吉備の中山
」（16オ）

夕雪

161 いざこゝにこま引き留めてはらはまし袖につもれる夕ぐれの雪
162 雪積もる麓の庵は埋もれて高根の松に夕日さす也

月前霰

163 月にちる影もくだけて石川の早瀬にひゞく玉あられ哉

164 閑居夢
△柴の戸のやつれを洩る風の音に見はてぬ夢の覚めて寒けし

馬

165 夕日さす枯れ野ゝ末の放れ駒里は床しき声の聞こゆる
166 朝げたく里の杉村声もれていなゝく馬やいづち行くらん
」（16ウ）

某の七めぐりの忌に

167 天津空むかしの月の俤をしのぶ心も霞む夜半哉

漁村烟

168 夕日さす磯わの嵐吹きたえて苫家の烟空に立つ見ゆ

冬述懐

169 △位山ふもとに生ふる草ながらかしらの雪は猶つもる也
」（17オ）

船上山

170 月影はやゝかたぶきて船上の山風寒く小夜更けにけり
171 ○春されば沖津白浪音絶えて雲ゐに霞む船上の山

連夜待恋

172 かぞふればつらき夜毎を待ち侘びて月にもかこつさよの手枕

青

173 △小山田の早苗のみどり風過ぎて雨さへ青く畦めぐりせん

寄月恋

174 三日月のほのかに影を見てしより心みだれぬ夕暮ぞなき
175 おもひ侘びねられぬ夜半の月影にくまなき物は涙也けり
」（17ウ）

176 寄鏡恋
朝な〳〵向かふかゞみに恋すてふわがおもやせのうかれける哉

177 出雲の国造殿御賀に
△とし高くしげれる松に鶴山の千代をあらそふ色は見えけり

178 人の四十の賀に
うつし植ゑし子の日の小松今年より君と千年の蔭きそふらん
」（18オ）

179 暮林帰鳥
△大空に声を残してむら鳥の帰る林は暮れにけるかな 自

180 △とまり鵜の帰る林は暮れそめて山ぎはあかき雲の一むら 自

181 秋旅
終夜露もみだるゝ袖の上になみだをそゝぐ草枕哉

182 嵐ふく外山の音を枕にて夢もみぢかき秋篠の里

183 暮山眺望
△夕されば嵐も絶えて遠方の高根の松にかゝるしら雲
」（18ウ）

184 夏旅
古里に通ひもあえず覚めにけりはかなく結ぶ夏の夜の夢

185 春旅
旅衣袂もおもる春雨に蕨や摘まむ山の下道

186 冬旅
今よりは旅寝の夢もさえぬべく落ちば衣をたちや重ねん

187 旅泊花
△仮寝せし宿の桜も咲きぬらん枕にかをる明けぼのゝ空
」（19オ）

188 遠村鶴
しらみ行く煙の末の松蔭にもるゝも遠き鶴が声哉

189 〳〵山かげの松原ごしに〔聞こゆ也〕里見えて鶴が音遠き朝ぼらけ哉 自

190 人の名残に
追風よく君が舟出と聞くからはひくに引かれぬ千代の友綱

191 祝
若松の二葉よ千世にさかえなん鶴の毛衣たち重ねなん

192 末遠く豊かにすめる此の宿に千世よばふ也鶴の諸声
」（19ウ）

193 人の六十賀に寄稲祝
小山田の晩稲の穂波千代かけてよるともつきぬ君がよはひか 自

194 鹿島重意居士七めぐり御忌日に
春の夜の月は昔に霞めどもたゞめの前の俤にして

195 鶴
あまがける田豆の行くえは暮れはてぬ星の林に塒しぬらん

196 もえ出でし沢辺のまこも春めきて霞をたどるたづの声哉

197 八千代経てしみさびたてる松が枝や子をおもふ鶴のかざしなるらん
」（20オ）

198 寄雪祝
とし深き野べの松原千世こめてながめつきせぬ雪の色哉

199 赤
處女らが末つむ花の片色に紅にほふゆふひかげかな

白

200 ふり積もる雪の山田の明けぼのにさか羽みだれて鷺のとぶ見ゆ　㊀

西行上人六百五十回忌寄花懐旧といふことを

201 みよしの丶花の姿も散りはて丶俤ばかり匂ひぬるかな　」（20ウ）

重好の母の身まかり給ふ時

202 風さそふみ草の露と消えにけり君がかたみは言葉のみして

重好ぬし出雲の玉造に旅宿りける折

203 草枕露の袂もいつしかに都となる丶秋も有りなん

人の六十の賀に春祝

204 此の春の千とせをつぐる鶯の初音も長き君が御代哉

萩園翁霊遠きに夏懐旧といふ事を

205 夕やみの頃なつかしくおもひ出でてながむる空に飛ぶほたる哉　」（21オ）

海

206 わたつ海はかぎりもなげに見ゆる哉五百重の浪のよせ帰りつ丶　㊀

黒

207 雨につれてさわぐ羽音の山烏何のさがにや闇に啼くらん　㊀

百舌鳥

208 明けぬるか薄霧がくれ鵙鳴きて岡辺のくぬ木朝日さす也

209 おしねほす田中の杜に鵙なきて木末の紅葉かつこぼれつ丶　㊀

210 一むらはまだ夜ごもりに朝けたく煙いぶせき鵙の声哉　」（21ウ）

橋

211 雨はる丶雲の絶え間にかつ見えて夕日ぞ渡る峯の桟　㊀

212 落ち滝つ谷の桟雲立ちて音こそひゞけ山もとゞろに

鐘

213 雨そゝぐ軒の村竹風過ぎて枕に残るかねの音哉　㊀

古蔭ぬし五月ばかり帰国■■れける別れに

214 いまはとて君いそぐとも立花の香をりとゞめよ軒の朝風　」（22オ）

山家

215 朝夕に折たく柴の薄烟こゝろ細くもすめる庵哉　㊀

216 朝夕に雲のみかゝるみ山べの夢や嵐にまかせ立つらん

寄山恋

217 夕暮の霞の中に埋もれて思ひ重なる遠方の山

右弐百二十首

（裏表紙見返し）　」（22ウ）

〔甲寅夏　採風集二篇料　詠草　翻刻〕

甲寅夏

〈採風集二篇料〉（朱）

詠草

〈国所〉（朱）

〈鹿嶋〉（朱）長行〈上〉（朱）
〈御印
可下候〉（朱）
」（表紙）

（家の間取り図　省略）　」（表紙見返し）

閑居夢

1　●柴の戸のやつれを洩る風の音に見はてぬ夢の覚めて寒けし○

馬

2　●夕日さす枯れ野、末の放れ駒里は床しき声の聞こゆる○

同

3〻　朝な〳〵はたこの馬を引き出でて世を渡るこそ安けかりけり○

〔山家〕砧

4〻　●山深き梢〔梢〕の月の小夜ふけて志賀の浦家に衣うつ也○
」（1オ）

立春

5〻　●吹きなびく雲の袖は明けそめて四方の山かげ春や立つらむ○×

橋上霜

6　●霜結ぶ丸木の橋の哀れさを渡りし人の跡に見るかな○

七めぐりの忌に

7　●天津空むかしの月の梯をしのぶこゝろも霞む夜半哉○

惜春

8　●立ち并ぶ杉のみ山の夕日かげたなびく春の暮れおしむ也○×
」（1ウ）

船上山

9　●月かげはやゝかたぶきぬ船上の山風寒く小夜更けにけり○

山家鶯

10　●いつしかと我が住む山も春めきて長閑にもなく鶯のこゑ○／

海上霞

11〻　●海人舟の行くへをしたふ山風は〔見えて〕沖の霞も〔打ち〕なびきつるかな〔ゝ〕○×

連夜待恋

12　●かぞおればつらき夜毎を待ち侘びて月にもしかのぶさよの手枕○
」（2オ）

閑庭菫

13　●世に住みし春のゆかりに我が庭の垣根のすみれ花咲きにけり○×

春曙

14　●赤星の霞める見れば山眉の花かあらぬか春の明けぼの○×

五月雨

15　●雲かゝる岡の松原風絶えて日影もゆらぐ五月雨ぞ降る○／

水鶏

16〻　草の戸をもる月影もいつしかと時のまに更け行くかたに水鶏なく也○×
」（2ウ）

五月雨晴

17〻　●うき雲はやゝ散りにけり山のはの嵐もはるゝ五月雨の空○／

雪

18　●かの岡の暮れ行く雲の末晴れて雪に染めたる木ゝの色かな○

【翻刻・解題】　山陰歴史館蔵『採風集二編料』（渡邊　健）

夏月

19 ●薄衣涼しき月の影さしてしばし戸ざゝぬ夏の夜はかな○×

月

20 ●秋の夜の入江に更けて哀れ也月の水草もなびきのみして○
」（3オ）

水仙花

21〻●此のごろの垣根は雪に埋もれてたゞめづらしき花（ひとりやつれぬ）を見る哉（の色かな）○

青

22〻●小山田の早苗のみどり風過ぎて夕雨［さへ］青く畦めぐりせむ
○

水鶏

23 ●窓近く水鶏鳴く夜の月影にわが隠れ家も戸ざしかねつゝ○×

開夏

24 ●ぬぎかへる花の衣の名残までのこるばかりに夏は来にけり○／
」（3ウ）

同

25〻●明け渡す磯山松に散る波の薄雲かゝる夏はきにけり○／

卯花

26 ●朝ぼらけ一むら白き道とへば賤が垣根のうつぎなりけり○／

同

27〻●夕まぐれ若葉の奥に一むらの雪かと見えてうつぎ咲きけり○／

初秋月

28 ●西空にほのめき渡る三日月のあらわれ（ママ）そめて秋や立つらん○／
」（4オ）

富士

29 ●夕風に雲もと絶えて立ちのぼるけぶりは布士の麓也けり○

残暑

30〻●夕川の早瀬（も）は夏はよどむらしまだあつき日の影は見へ（ママ）けり○×

同

31 ●桐の葉はおのれとぢれど夕日影さすがにあつき庭の真砂地○×

稲妻

32 ●稲妻のあたりやいづこむぐらふの葉末の露の光をぞみる○×
」（4ウ）

同

33 ●かの見ゆるは山が末は暮れ初めてこゝろゆかしき稲妻のかげ
○／

野秋風

34 ●朝ぼらけ遠のはり原露落ちて野づらにしるき秋風ぞふく○

同

35 ●見わたせばち草小薄露ちりて鳴なく野づら秋風ぞふく○

川上霧

36 ●吉野川流るゝ水の音す也ふちせもわかぬ瀬ゝのうき霧○
」（5オ）

寄月恋

37 ●三日月のほのかに影をみてしより心みだれぬ夕暮ぞなき○

虫

38〻●霧深きをかごへ（ママ）道の浅ぢ原袖にこぼるゝ松むしの声○

待月

39〻●鳴つる（ママ）ゝ雲ゐの雁の声にのみ高根の月のまたれぬる哉○

寄鏡恋

40 ●朝な〳〵向かふかゞみに恋すてふわがおもやせのうかれける哉○

」（5ウ）

虫

41 ●月くらき片山里の雨雲にふり出でてなく鈴むしのこゑ○

同

42 ●夕されば小笹が上を吹く風の絶えまもとむる松虫の声○

待月

43 ●月を待つ峯の松原霧こめて空だのめなる霄（そら）にも有る哉○

燕子花

44〜●かきつばた木隠れ茂き一本にゆかりの色の花は咲きけり○×

」（6オ）

月前時鳥

45 ●月いづる山松影は雲もなし（く）しのび音高きほとゝぎす哉○／

関路月

46 ●雲はらふ嵐も絶えて見るが内に不破の関路は月更（ぞ）けにけり（越行）

月前管絃

47〜●さやかなる笛のしらべに中空の月も声あるこゝちこそすれ○

」（6ウ）

同

48 ●すなほなる神世の事も笛竹の音にあらはれて月も澄みけり○

鹿声何方

49 ●有明のつれなき影にいづこよりあらしのおくる小男鹿の声○

暮林帰鳥

50 ●大空に声を残してむら鳥の帰る林は暮れにけるかな○

」（7オ）

庭菊

51 ●朝夕に露の数さへ千代かけてたえずもかをる庭の白菊○

同

52 ●咲きそふ（つゞく）ませの籬の〔菊の〕ひと色（は）を夕日のそむる〔にほひ也けり〕庭の白ぎく○

秋旅

53 ●終夜露もみだるゝ袖の上になみだをそゝぐ草枕哉○

」（7ウ）

同

54 ●嵐ふく外山の音を枕にて夢もみちかき（ママ）秋篠の里○

月前擣衣

55 ●山のはにほのめく月の影めでゝ夜ごろ打ちそふ賤がさ衣○

同

56 ●かの見ゆる磯山嵐音更けてかたぶく月に衣うつなり○

」（8オ）

同

57 ●さ（え）渡る月に打ちそふさ衣の音もゆかしき山の下庵○

山家紅葉

58 ●山姫の織るか山路の紅葉ゝは露をそめ木の錦也けり○

同

59 ●朝霧の八重立つ山の紅葉ゝは人しらぬまにちりやはてなん○

」（8ウ）

同

60〜●村時雨晴れ行く見れば山のはも軒ばもおなじ紅葉也けり○

暮秋

61〜●きのふけふ霜こそかゝれ刈り残す稲葉くたれて秋ぞふけ行く○

同

62　●刈り残す小田のおくてにそよぎつる風さへさゆて秋ぞくれぬる　○

」（9オ）

松上霜

63　●夜たゞ吹く嵐は絶えて磯山の松の葉白く霜さやぐ也○

河氷

64　●杣川や氷のくさびうつなへに瀬ゝこす浪も音よはりつゝ○

同

65　●冬されば水さへかれて谷川のさゞれのひまもうす氷せり○

」（9ウ）

暁千鳥

66　●難波がた磯の芦原月消えてあかつきやみに千鳥鳴く也○

同

67　●明石がた暁くらき汐風に一むらかよふ磯ちどり哉○

同

68　●磯山は松かげ寒き明けがたの嵐のすゑにちどり啼く也○

」（10オ）

同

69　●舟はつるかこの湊の暁にうらさびしくも鳴く千鳥哉○

暁郭公

70　●ほとゝぎす今一声はいづかたの月にのこせし有明の空○×

萩

71　●月更くる片山影は露ちりてきしの萩原風そよぐ也○

」（10ウ）

鶯

72　●長閑にも垣根の梅のかほり来て風の行くへに鶯のなく○／

若水

73　●汲みなれし庭の井筒も春来ぬと今朝若水にあらたまりけり○×

」（11オ）

暮山眺望

74　●夕されば嵐も絶えて遠方の高根の松にかゝるしら雲○

夏旅

75　●古里へ通ひもあえずさめにけりはかなく結ぶ夏の夜の夢○

月前納涼

76　●夕暮は風にうすれし山のはにほのめく月の影ぞすゞしき○×

」（11ウ）

早春

77　●久かたの空のみどりも啼く田豆の声にとゝなふ春のあけぼの×

若菜

78　●山〳〵の霞の衣春くれば軒ば放れて若菜摘む也○×

山家鶯

79　●谷の戸も春は来にけり梅が香に初音をこぼす軒の鶯○／

」（12オ）

残雪

80 ●花咲ける草の庵はのどけきにいまも残れる跡のしら雪○×

同

81 ●松の戸も此のごろ匂ふ花の香にけたれて残る峰の白雪○×

川辺柳

82 ●山川の氷ながれて朧夜の月にけぶれる青柳のいと○／

」（12ウ）

帰雁

83 ●久かたの雲井にみてる浪の上に名残も霞む雁の声かな○×

野辺花

84 ●嵐吹く木末は花の色消えてつら〳〵かをる旅の袖かな○／

メヲナス

」（13オ）

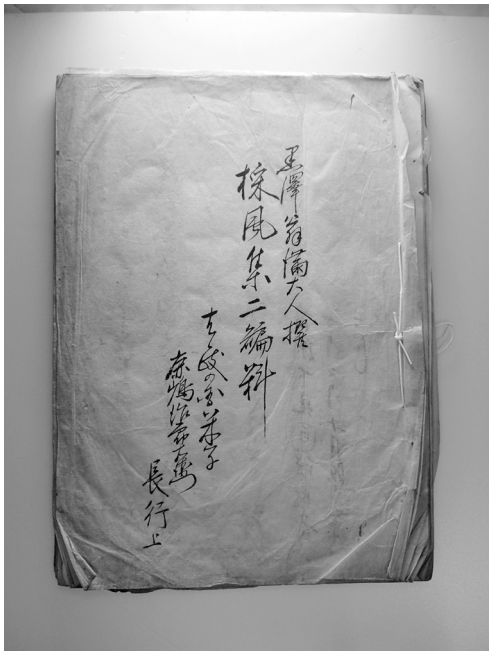
〔付記1〕

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域の文学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト」（二〇一九～二〇二一年度、代表・田中則雄）、科学研究費補助金（基盤研究（C））「近世後期の鳥取の和歌に関する資料調査と総合的研究」（課題番号 20K00359 代表・渡邊健）による研究成果の一部である。

〔付記2〕

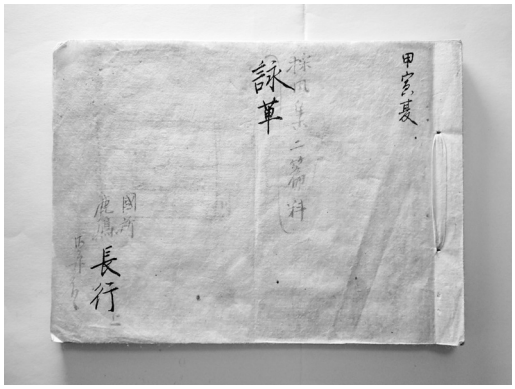
本稿を成すにあたり、貴重資料の閲覧、翻刻と写真の掲載をご許可いただいた山陰歴史館に深謝申し上げます。

〔参考図版〕

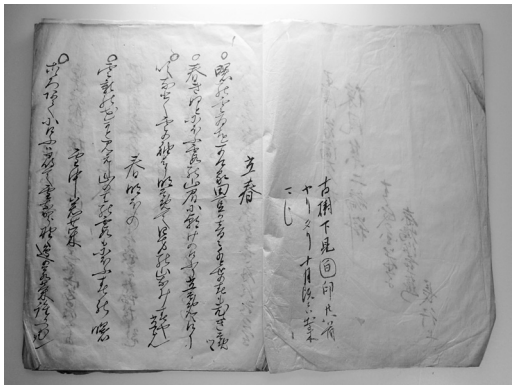


1．『採風集二編料』　表紙

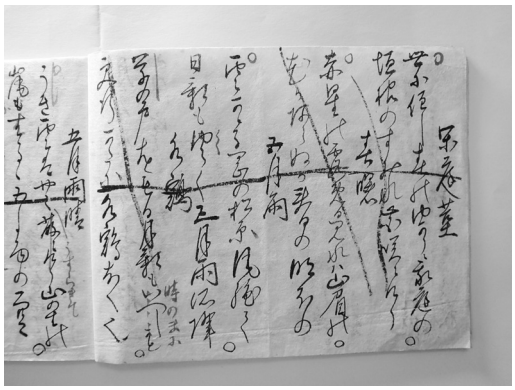
2．裏表紙



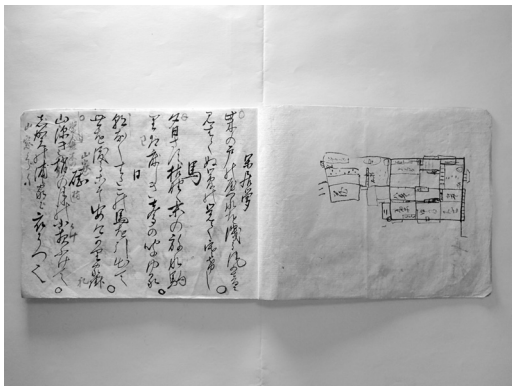
4．『甲寅夏　採風集二篇料　詠草』 表紙



3．表紙見返し、１オ



6．２ウ



5．表紙見返し、１オ

Reprinting and bibliography “Saifu-syu 2 henryou” possession of Municipal Yonago Historical-Museum

WATANABE Ken
(National Institute of Technology, Yonago College)

〔Abstract〕

This paper will offer the reprinting and bibliography of two kinds of “Saifu-syu 2 henryou” owned by Municipal Yonago Historical-Museum. They are the draft of waka poems which Kashima Nagayuki had made when he contributed waka poems to “Ruidai Saifu-syu 2” published in 1957. Nagayuki was the ninth of the Kahima family that was a wealthy merchant in Yonago in the late Edo period. These two kinds of “Saifu-syu 2 henryou” are extremely valuable materials because we are able to assume the relationship between Ruidai Wakasyu (collections of waka poems which were commercially published one after another throughout the country at that time) and local poetry circles.

Keywords: The Kashima family, Kashima Nagayuki, Yonago poetry circle, Ruidai Waka-syu